

遺骨宰領者となって内地に帰還することが古年兵の楽しみの一つだったのですが、私は焼く方専門で宰領したことはありません。

昭和十八年、山西作戦が始まり、六カ月間討伐に出動しました。私は本部詰めでしたが、山西の地形は厳しく閻錫山の中国軍と八路軍の両方が相手ですから大変な苦勞でした。特に八路軍の待ち伏せ作戦にかかり、小さな部隊の全滅が相次ぎました。

間もなく、昭和十四年兵が除隊するのを見て、次はいよいよ俺たちの番だなあと胸をふくらませたのを覚えています。

昭和十九年四月、兵役延期中のところ、軍令〇〇号により満期除隊となり、千葉県佐倉の東部六十四部隊に帰り、ただちに除隊となりました。

その時の階級は陸軍上等兵でした。家に帰りますと父母は健在でしたが、海軍へ行った次兄は昭和十九年六月十九日のマリアナ海戦で空母「翔鶴」に乗っていて沈没、戦死しました。他の兄は無事帰りました。

除隊してから酒屋の娘と結婚して養子となり、現姓

の斉藤と改姓。薪炭、プロパンの販売も手がけ、娘一人ですが婿を取り跡継ぎにしました。

戦友会をやるので入隊時の名称を頼りに通知を出しても戦死した者が三分の一もあり、現在生きている者は二十二人と減少し、出席できる者はわずか八人となり寂しい限りです。

## 機関銃隊員として戦務

栃木県 小林 正雄

私は栃木県安沢郡の農家の長男に生まれ、父母のもとに兄弟妹九人とともに育ちました。学校卒業後家事に従事し、青年学校を終了し、昭和十八（一九四三）年徴兵検査で無事甲種合格でした。

昭和十八年十二月二十日、現役兵として独歩第二十大隊歩兵第一一五連隊（高崎市）第七中隊に入営しました。翌年一月七日、屯営を出発、博多港より出港、釜山、鮮満国境、山海関を通過し、原隊の駐屯地であ

る山東省諸域に到着、追及しました。

中隊は第四中隊と定まり、中隊の中に一個分隊だけ機関銃が所屬された編成であったので、私はその機関銃隊員と定まりました。

我々昭和十八年次兵は、小学校の頃から既に戦時中であつたため戦時観念が体の中に浸透し、満ちていた関係もあり、大きくなつたら立派な兵隊になり、皇国に尽くすのが当然であるという観念のもとに育つた年代でした。為に入隊や出征がごく当然のことであり、上官や古年次兵に叱られたり、叩かれたり制裁を受けることを甘受する気持ちが養成されて育つていたのでしよう。

特に機関銃隊は一丁の機関銃を中心に十数人の隊員が運命を共にする集団である点が強要され、一心同体の精神涵養のため、叱責は分隊全員で受けることが通常であった。時には素裸でふんどし一つになって帯革で力いっぱい叩かれたこともあつた。

機関銃は全重量六〇キロもあり、敵に近接したり、駄馬に故障が生じた場合、頻繁に「分解搬送！」の命

令が下る。銃身部三〇キロ、脚部三〇キロに分解し、肩に担いで走るのだ。銃身も脚も交代要員各一人あつて、この「分解搬送」の命令が下ると、全隊員が身震いをして恐れた。私は体も恵まれ、入隊前に農家の辛い作業に鍛えられていたので、「分解搬送」は苦にしませんでした。それどころか重機関銃を分解もせず一人で担いで皆を驚かせたことがありました。初年兵教育は六カ月で終了しました。

機関銃班長は下士官でしたが、討伐等の編成では兵長の方が分隊長を代行することもありました。

編成は駄馬編成で、銃馬一、弾薬馬一、予備馬一、二頭で、日本馬二頭、中国馬一、二頭の編成でした。馬にはそれぞれ癖があり、蹴癖、噛癖、逃癖、狂奔癖等々で、日常馬を飼育管理する我々初年兵を泣かせました。

山東省一带は治安が比較的平穩であつたが、日本軍全般に戦況不利に傾いた昭和十九年末頃から共産軍の攻勢が強くなり、それに加えて今まで日本軍に協力し

て治安維持に協力していた和平軍の反乱が相次いで発生し、山東省駐留のわが部隊は、これらの討伐・鎮圧に東奔西走の渦中に投ぜられました。この作戦も、玉將軍の率いる和平軍の反乱鎮圧は旅団長の指揮する大規模な作戦でした。

部隊は敵を包囲殲滅を目標に分進し、目的地に到達しましたが、敵はわが軍の計画を察知してか、既に目的地には敵影は無くもぬけの殻、部隊が啞然としていた時、突然敵の乗馬の一隊が現れ、下馬すると散開し、果敢な攻撃前進に移ってきた。わが隊も急ぎよ体勢を整え反撃に移った。この時、敵の果敢な攻撃姿勢に感動した旅団長が「捕らえよー！」と下令した。直ちに射撃中止が命ぜられ、双方対峙している間に、これは敵でなく友軍である事が判明し、危機一髪、友軍相討ちの悲劇から救われた。

この県域の攻撃には我が軍は苦戦を強いられた。それは、この県域の守備は当初は日本軍と和平軍が協同で守備を担当していた。為に日本軍の企画指導で防御

陣地が作られ、ほぼ完璧な火線配置が企画実施されていた。この県域の守備を和平軍に譲って後退せざるを得なくなったのは、中国大陸守備軍の南方転出のための兵力の減少のためだった。

この和平軍の反乱のための攻撃戦であった。こうした堅固な守備陣地の攻撃にあたっては、部隊は当初から苦戦を覚悟の攻撃であった。我々機関銃隊も射撃が敵陣の要所、要所を潰して前線小隊の前進を促した。特に射弾の無益な消耗を避け、短射要点集中に意を払って射撃を行った。発射速度一分間六〇〇発の猛発射速度を持つ機関銃の携行弾薬数は、一箱二〇連、二連二〇発、四〇〇発が弾薬手一人の携行弾数で、四人の弾薬手で一六〇〇発が一銃の携行弾数である。ゆえに日頃から有効射撃に注意を払った。特に射撃指揮を執る小・分隊長と射手上等兵の責務でした。

この県域の攻撃には、配属砲兵の特殊弾攻撃で、敵は一方に退路を求め敗退したのでした。我々の機関銃分隊は弾薬の節約を心して戦ったため、ある戦闘では弾丸を撃ち尽くした機関銃に弾薬を貸与したことも

ありました。

この攻略戦が終わって基地へ引き揚げの時、私は弾薬馬の馱兵として弾薬馬を馱して行進中、馬が路面の段差につまずいて不意に転倒し、弾薬の重みで立ち上がることも出来ず、横転の状態でもがくだけ。分隊の最後尾を行進していたので、前を行進していた兵との連絡も取れないまま残置された。

最後尾を歩いていた古兵殿がただ一人引き返して弾薬の積み降ろし、鞍の装着を手伝ってくれた。その間、後続行進中の和平軍はどんどん行進して来て、本隊との間に割り込んで、ますます私達弾薬馬との間が離れ、連絡が絶たれて行った。その時のなんととも言えない孤独感、協力していただいた古兵に対する感謝、戦後五十余年たった今日も忘れることの出来ない思い出となった。

第二中隊に配属になって出撃した時、私は機関銃小隊長（曹長殿）の当番兵として出撃しました。敵と遭遇して交戦中、突如敵側に強力な救援隊が出現したた

め中隊の戦況が急に悪くなった。初めに小隊長の乗馬が負傷し、この混乱の中で小隊長が臀部に負傷、混乱がますます拡大していきました。負傷された小隊長は同行した苦力を四、五人割いて担架に乗せて後退をはじめました。敵の追尾が急で、苦力がともすると逃亡しようとするので、私は小隊長の拳銃を預かり空に向かって二、三発、発砲して逃亡を押さえつつ後退を続け、ついに安全地帯に離脱しました。

この離脱戦闘で擲弾筒が大変効力を発揮しました。数発の擲弾筒弾の中、命中で敵の追尾の勢いを阻止することが出来、中隊の離脱が成功したのです。擲弾筒の着弾は敵に対する殺傷効力も大きいですが、その爆発の音響が敵に与える心理的な効果も絶大なものがあつた。

第一線歩兵小隊が装備携行しているので、目標を随時随所に発見しつつ射撃出来るので、歩兵兵器の中でこの擲弾筒と九二式重機関銃が最も優秀兵器であったと思う。

重機関銃は、

一 目標に対する命中度が高かった

二 連続発射中故障が少ない

三 第一線歩兵に虜接した戦闘可能

いずれの戦場でも、日本軍の重機の発射音である「ドゥ、ドゥ、ドゥ」の連射音が耳に入ると、散兵線が急に明るくなり喜色が蘇ったものでした。

昭和二十年に入ると、米軍の中国大陸への上陸を想定して兵団は青島周辺の防衛配備に移動しました。そして防衛陣地構築に専念することとなりました。

この地区の地質は岩盤が多くて陣地掘削に非常に困難を極めました。工用具もない中で機関銃銃座壕、射線の開削、交通壕と円匙、ツルハシとノミの手作業の毎日でした。銃座を覆う掩蓋は資材不足にて着手出来ず、後刻、資材入手時補強することにして、工事の進捗に専念しました。

配属された古い野砲（明治四十五年式）には召集前大工職の兵を集め、衆知を結集して見事回転式砲座を作成しました。陣地配備には機関銃、歩兵砲は大隊長直轄指揮下に入り、陣地配備も所属中隊長の意図を体

して決定された場合もありました。

七月二十八日、青島に近い孫家芥で爆風で腰部に負傷、青島陸軍病院入院しました。終戦は無線手あたりから「日本が負けそうだ」との流言は流れていましたが、それが現実でした。国家の将来、自分、家族の今後の事など考えるほど不安なことばかり。大隊副官は中国に残留して奥部に潜入して抗戦の宣言して一人旅立たれた。混乱の中、青島郊外の旧レンガ工場に収容され俘虜生活となりました。

昭和二十一年二月六日、佐世保に復員上陸、直ちに故郷栃木県に帰着。元気な父母兄弟と再会することが出来ました。帰郷二年後、隣村の親類の家である現在の小林家に縁づき、農家を営み、二児を養育し、喜寿の祝も終わり無事に暮らしています。腰の傷は年と共に疼痛が増し苦しんでいます。医師も行政も「昔日の問題」として取り上げてくれないままの状態で今日に及んでいます。